

宮城県亘理郡山元町 合戦原古墳群第4次発掘調査報告

辻 秀人・板垣 溪太・上野 加織・大友健太郎・金澤 日本
今野 莉帆・佐藤 志帆・佐藤 緋菜・佐藤有莉佳・奈良 朋宏
福澤淳之介・横山 志穂・吉村奈々子・米澤 侑夏

調 査 体 制

第 4 次調査

調 査 期 間	2019 年 8 月 5 日～8 月 18 日 8 月 26 日～9 月 2 日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
調 査 担 当 者	辻 秀人（東北学院大学文学部教授）
調 査 員	横山 舞（東北学院大学大学院博士課程前期 2 年） 加藤雄大・賀屋由布・高橋伶奈（大学院博士課程前期 1 年） 板垣溪太・上野加織・大友健太郎・金澤日本・今野莉帆 佐藤志帆・佐藤緋菜・佐藤有莉佳・奈良朋宏・福澤淳之介 横山志穂・吉村奈々子・米澤侑夏（歴史学科 3 年） 浅野壺斗・阿部遼人・五十嵐雅陽・狩野山航・坂田智哉 高野ほのか・沼崎雅弘・藤村 楽・古川真登・松田 進・松橋七海 村上景亮・村松大永（歴史学科 2 年）
調 査 協 力	山元町教育委員会 山田隆博・佐伯奈弓（山元町教育委員会）
土 地 所 有 者	山元町

例 言

1. 東北学院大学考古学辻ゼミナールでは、2018 年から宮城県亘理郡山元町合戦原古墳の調査を継続して実施してきた。合戦原古墳群はこれまでに緊急調査、測量調査が実施されている。これに加え、2017 年に山元町教育委員会が古墳群性格解明のための調査を実施している。この調査を合戦原古墳群第 1 次調査と理解し、2018 年夏の調査を第 2 次調査、2019 年春の調査を第 3 次調査、2019 年夏の調査を第 4 次調査とした。本書は合戦原古墳群第 4 次調査の報告書である。
2. 調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
3. 調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻学生、考古学ゼミナール所属学生を中心とする東北学院大学文学部歴史学科の学生、参加を希望した歴史学科 1 年生である。
4. 作成図面などの整理作業は、東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の 3 年生が中心となって行った。
5. 本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものであり、最終的な文責は辻にある。
6. 本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示す。

これまでの調査概要

合戦原古墳群は昭和38年に国道6号線改修工事で一部壊されることになり、事前に調査されたことがある。3基の古墳が調査されたが、埋葬施設は発見されず、若干のガラス小玉が出土した(志間1965)。また、1996、1997年には考古学研究者有志による測量調査が実施され、古墳群全体の姿が明らかにされた(青山、岩見、鈴木、田原、藤沢2000)。

2017年には山元町教育委員会による発掘調査が実施された。これまでの調査を踏まえて、東北学院大学考古学辻ゼミナールでは、古墳群の様相の解明と年代特定を目的とし、第2、3次調査を行った(辻2020)。調査は、最大の円墳である1号墳と、最高所に築かれた前方後円墳、5号墳を対象とした。調査の結果、1号墳では墳頂平坦面に埋葬施設を発見し、木棺直葬であることが判明した。また、木棺埋納後、上面に木棺よりやや広い範囲に白色粘土を敷いている。5号墳は土地所有の問題で全面を掘り下げることができなかったが、測量の結果、全体像を把握した。5号墳は前方部が細長く、地形を利用して築かれていることが判明した。これらの調査により、現段階では1号墳、5号墳ともに古墳時代前期から中期にかけてのものであると推測される。

参考・引用文献

志間泰治 1965「合戦原古墳群調査概報」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

青山、岩見、鈴木、田原、藤沢 2000「宮城県山元町合戦原古墳群測量調査」『宮城考古学』第22号

辻秀人他 2020「宮城県亶理郡山元町合戦原古墳群第2、3次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第61号



写真1 4号墳墳端検出作業

第1章 古墳群の概要

1. 古墳群の立地

合戦原古墳群は、宮城県亶理郡山元町高瀬字合戦原に所在する。阿武隈高地から樹枝状に東へ伸びる丘陵末端部に立地する。現状では国道6号線に接する位置にあたる(第1図)。古墳群東側台地上に平坦面があるが、その先は海岸平野で、太平洋に臨んでいる。

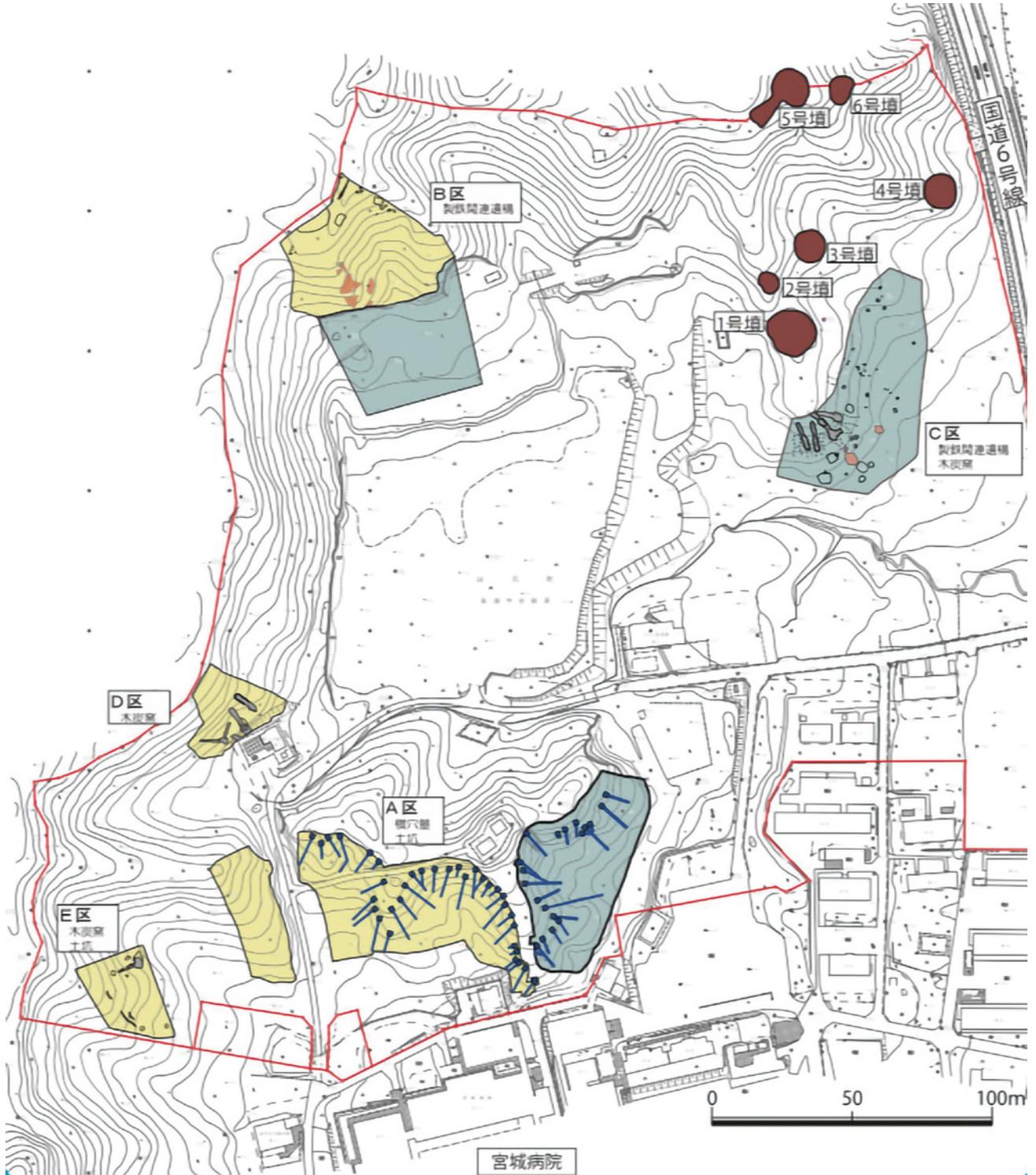
古墳群の周辺には多くの製鉄遺跡群が分布しており、この地域が福島県浜通り地方に展開する製鉄遺跡群の北端であることが判明している。また、南東約4kmには木簡が出土し、古代官衙と目される熊の作遺跡があり、古墳群の南西に接して54基を数える大規模な横穴墓群で、豊富な遺物を持ち、線刻画が発見されたことで知られる合戦原横穴墓群がある(第2図)。

2. 合戦原古墳群について

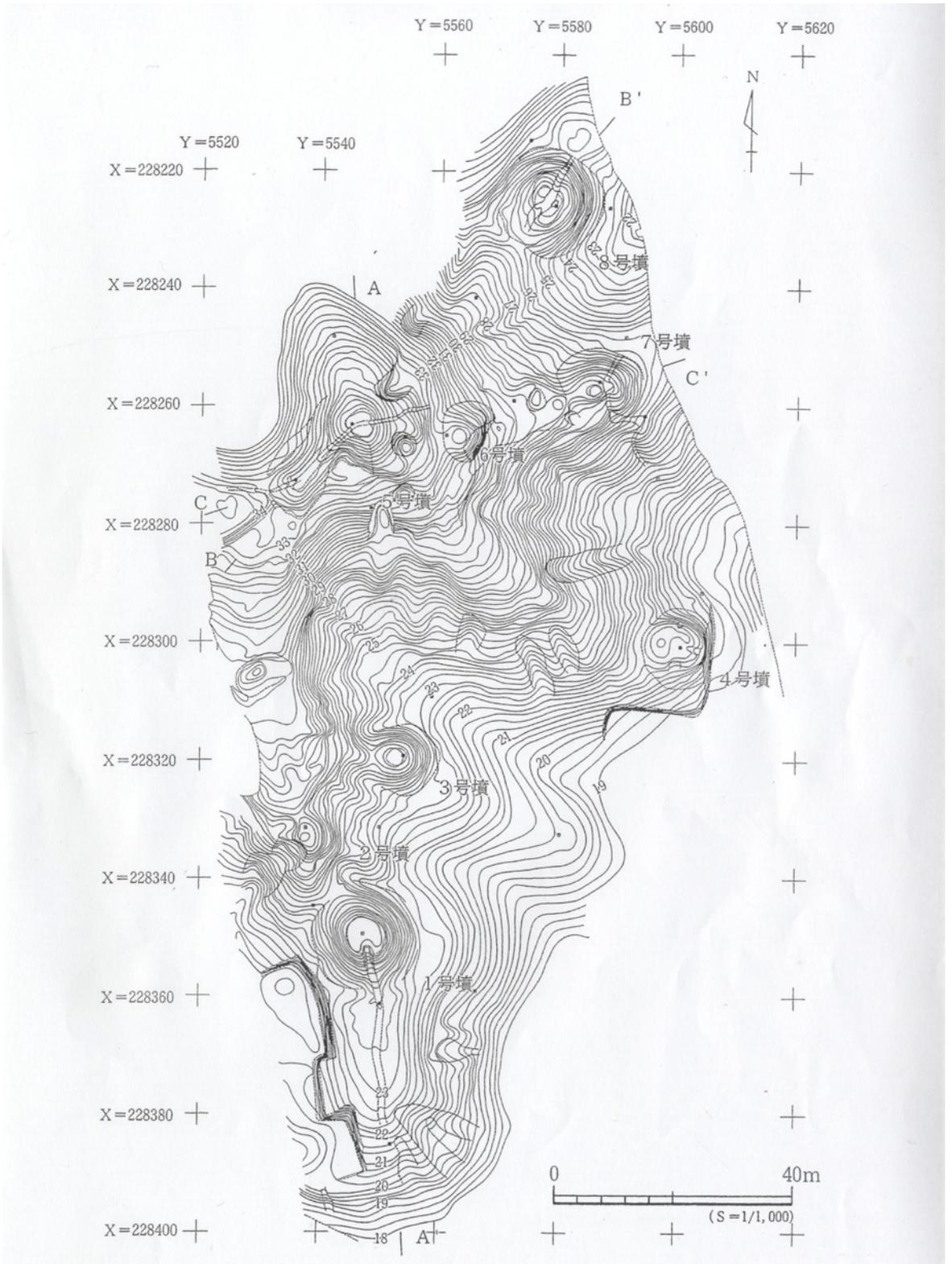
本遺跡は前方後円墳と円墳で構成されている。前方後円墳は最高所に位置しており、3次調査の測量の結果、全長25.4m、前方部前端幅約10.0m、後円部直径約15.7mを測る。円墳は測量段階では7基が確認されている。1963年に実施された緊急調査では円墳3基が対象とされているが、すでに失われている可能性が高い。本来は前方後円墳1基と円墳10基程度で構成されていた古墳群であったと思われる。



第1図 合戦原古墳群の位置(国土地理院GSIマップに加筆)



第2図 合戦原古墳群と横穴墓群の位置関係（宮城県山元町合戦原遺跡説明会資料より転載）



第3図 合戦原古墳群測量図
 (青山、岩見、鈴木、田原、藤沢「宮城県山元町合戦原古墳群測量調査」宮城考古学第2号 2000年より転載)

第2章 発掘調査

1. 第4次調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北地方古墳時代の様相を解明するために活動しており、2018年夏から山元町合戦原古墳群の発掘調査を開始した。山元町では3.11の大震災の復興に伴う大規模な調査が行われている。これまでに合戦原横穴墓群で線刻画が発見されるなど大きな発見があり、古代役所跡と考えられる遺跡や古代製鉄が行われていた遺跡も確認されている。この地域は古代の中心地の一つであったとみられる。しかし、合戦原横穴墓群以前、古墳時代の姿には不明な点が多い。

2018年夏の第2次調査、2019年冬の第3次調査では、本古墳群がどのような古墳群で、いつの年代のものなのかを明らかにすべく円墳の1号墳、前方後円墳の5号墳を対象にの調査を実施した。

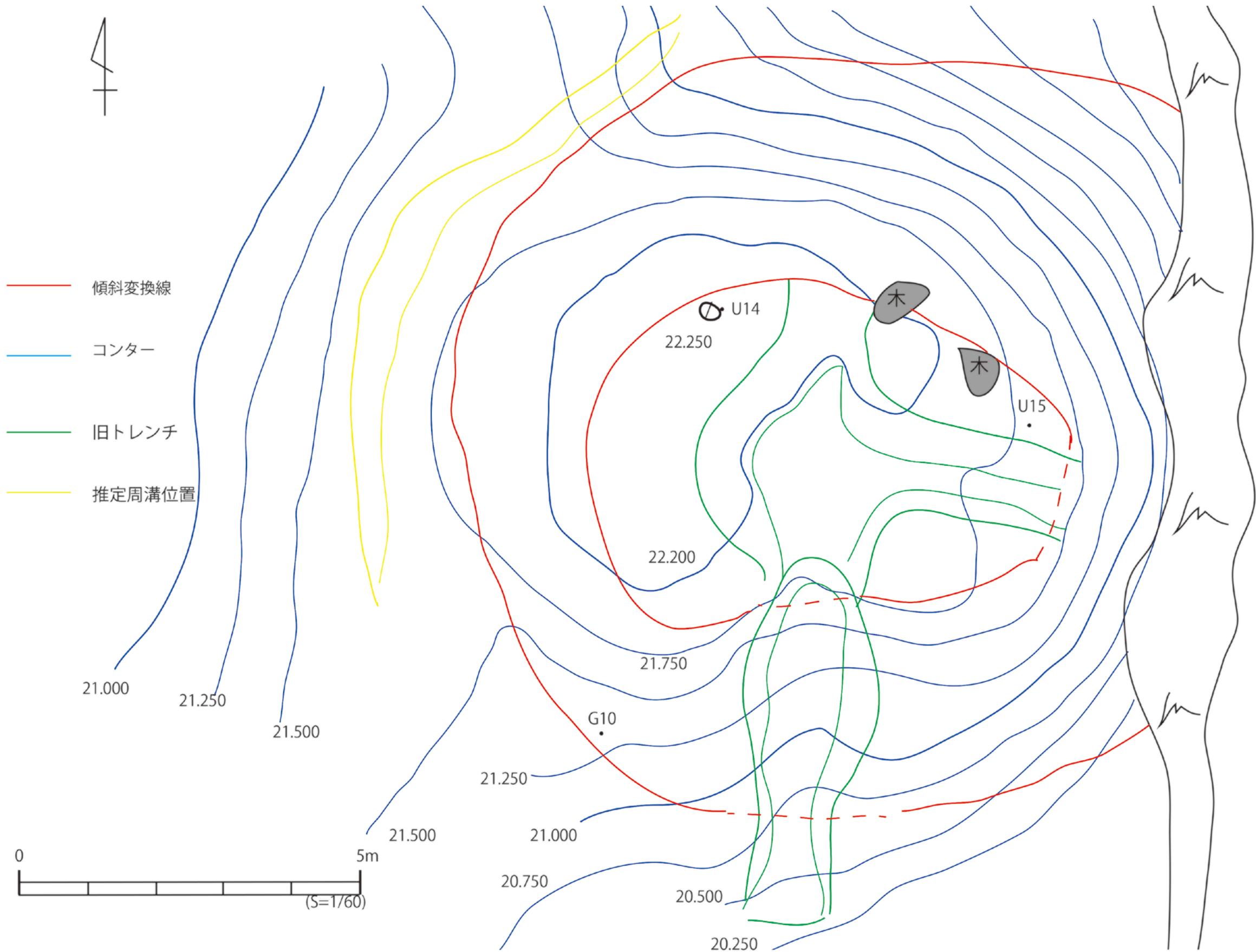
第4次調査では、前回までと同様、古墳群全体の性格を解明することを目的に調査を実施した。調査対象は、国道6号線沿いに位置する円墳の4号墳と、前方後円墳の東側に位置する円墳の6号墳である。4号墳、6号墳ともその構造と全体像を解明することを目的に測量をし、墳丘面を平面的に検出する作業を実施した。

2. 発掘調査結果

(1) 4号墳

4号墳は合戦原古墳群第3次調査で調査した5号墳から東側に延びる尾根上の先端に位置する。墳丘は国道6号線の改修工事によって東側が1/3ほど失われている。6号墳と同様東西の高低差が大きい。今回の調査では、古墳本来の状況の復元のために、幅約40cmの十字の畦によって区画設定した。北東の区画から時計回りに1区・2区・3区・4区とした。また古墳と尾根の関係を調べるため4区から幅約1mの5区を設定した。

5区では周溝の立ち上がりがあるか確認するため丘陵の方向へ区画の延長をしたが、明確な立ち上がりは確認されなかった。それぞれの区画を掘り進めたところ、山元町の調査によって設定された十字のトレンチ（以後旧トレンチと呼称）が確認された。そこで各区画の表土剥ぎと並行して旧トレンチの検出を進めた。その結果、旧トレンチが墳頂付近では墳丘表面より深く掘られ、墳端付近では墳丘表面を底面に掘られていたことが分かり、墳端付近では旧トレンチの底面を広げる形で墳丘表面の検出をしている。しかし墳端付近は堆積土が非常に多く、全区画での墳丘表面の検出には至っていない。その為、図面作成などの記録作業は手つかずの状況である。次回の調査では墳丘表面の検出を終わらせ、記録作業後埋葬施設の検出に移る予定である（第4図）。



第4図 4号墳平面図（掘り下げ前）



写真2 4号墳掘り下げ前

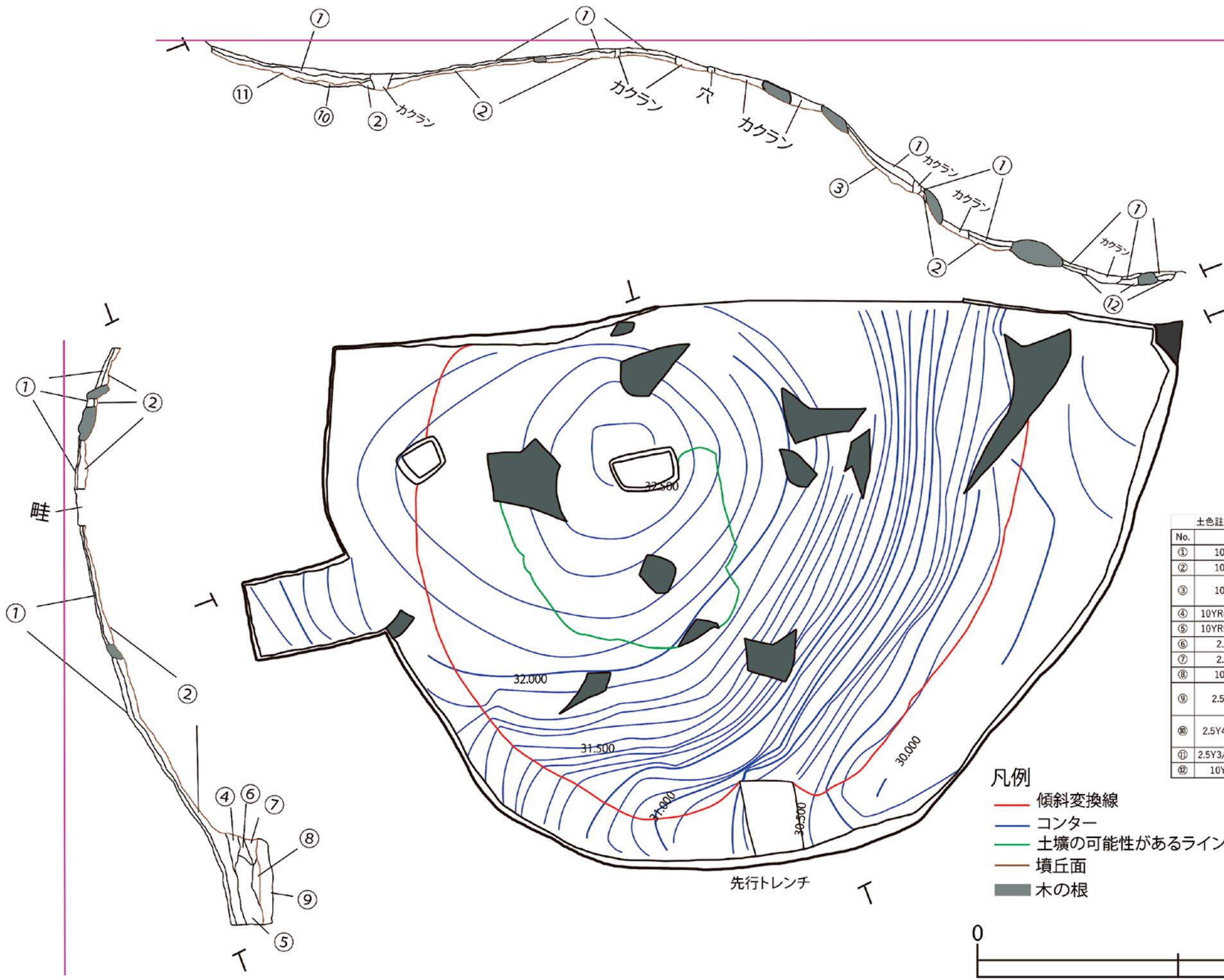
(2) 6号墳

6号墳は直径約7.6m、高さ約2.6mの円墳である。合戦原古墳群唯一の前方後円墳5号墳の東側に位置する。今回の調査では、古墳造営当時の墳丘の形状を見るために十字状に畦を残して区画を設定した。また、古墳の西側にある丘陵側にも区画を設定し、調査を実施した。墳丘北側は山元町所有外の土地であったため調査を行うことができなかった。

全区画で表土と墳丘堆積土等の除去が終了し、墳丘面が検出された。(写真4)東西の高低差が大きい特徴がある。(写真3)また、東からのびる丘陵を利用し、一部を成形した上で、土を積んで墳丘を形成されている(第5図)。

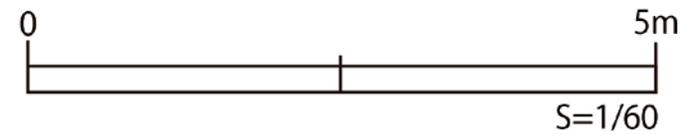
南北セクションの観察から、南側の墳端が検出された。北側は、調査区外であったため検出できなかった。また、東西セクションの観察から、東側の墳端は木の中と考えられ、検出できなかった。西側は検出された。

墳丘面では、土の質が異なる部分を検出した。(写真5)次回の調査では、墳丘面を中心に調査を進めていく。



土色註記					
No.	土色	しまり	粒度	粘性	備考
①	10YR3/4暗褐	弱	シルト	弱	腐植土
②	10YR4/4黄褐	中	シルト	中	墳丘堆積土 濁った黄色
③	10YR5/6黄褐	中	シルト	中	②を掘り抜いた可能性あり ②の下層か? 積土か
④	10YR4/3にぶい黄褐	中	シルト	中	
⑤	10YR5/4にぶい黄褐	中	シルト	中	
⑥	2.5Y5/6黄褐	中	シルト	中	
⑦	2.5Y5/4黄褐	中	シルト	中	
⑧	10YR5/6黄褐	中	シルト	中	
⑨	2.5Y6/6明黄褐	弱	粘土	弱	地山、白っぽい →東西セクション西側南壁と異なる質
⑩	2.5Y4/6オリーブ褐	強	粘土	強	地山 →南北セクション両側東壁と異なる質
⑪	2.5Y3/3暗オリーブ褐	中	シルト	中	墳丘積土
⑫	10YR4/2灰黄褐	弱	シルト	弱	地山の上 堆積土

- 凡例
- 傾斜変換線
 - コンター
 - 土壌の可能性のあるライン
 - 墳丘面
 - 木の根



第5図 第6号墳墳丘面平面図



写真3 6号墳全体（東から）



写真4 墳丘東側



写真5 墳丘上面付近



写真6 墳丘東側墳端（丘陵との接続部分）

ま と め

合戦原古墳群第4次調査では、再高所に位置する前方後円墳、5号墳のすぐ隣、東側に築かれた6号墳と古墳群の中で現状で東端に位置する4号墳を対象とした。6号墳は小規模な円墳で、4号墳は古墳群東端に位置し、比較的規模の大きい円墳である。この二つの古墳を調査することで、古墳群全体の様相を把握することが調査の目的である。

調査はいずれも十字にアゼを残して墳丘面を露出し、墳丘の姿を明らかにすることを目指した。4号墳は墳裾に墳丘から流出した土が厚く堆積し、墳裾の一部が未検出の状態です。調査期間が終了したため、平面図作成に至らなかった。6号墳は墳端を全面的に検出し、構築当時の墳丘の姿を再現することができた。

4、6号墳のいずれも東から延びる丘陵尾根線が降り始める地点を選んで構築されている。墳丘面西側は墳丘面傾斜は緩やかであるのに対して、東側はかなりの急傾斜を形成している。このため、それぞれの古墳は東側から見ると墳丘は高く、大きく感じられる。古墳築造者の意図を示すのだろう。これまで調査した1号墳でも同様に構築されており、未調査の古墳も同様の姿をしている。このような占地と墳丘構築方法は、合戦原古墳群を築造した人々の一環した手法であったと考えられる。

調査は4号墳で墳裾の一部が未検出であり、埋葬施設の探索もできていない。6号墳でも埋葬施設の検出はこれからの課題である。本来であれば、2020年3月に第5次調査を実施し、これらの課題に取り組む予定であった。しかし、2020年3月には新型コロナウイルス感染症が広がり、第5次調査を実施することができなかった。2021年1月の本原稿執筆時でも、首都圏などで緊急事態宣言が発出されるなど新型コロナウイルス感染症は収束の気配を見せておらず、今後の状況は見通せないが、いずれ第5次調査を実施し、調査成果をまとめる予定である。

謝辞

調査の実施に当たっては、山元町教育委員会をはじめ関係機関の皆様、調査を暖かく見守っていただきました山元町の皆様、宿舎をご提供いただいた宮城病院の皆様、調査地に隣接する復興住宅にお住まいの皆様にご協力を感謝申し上げます。